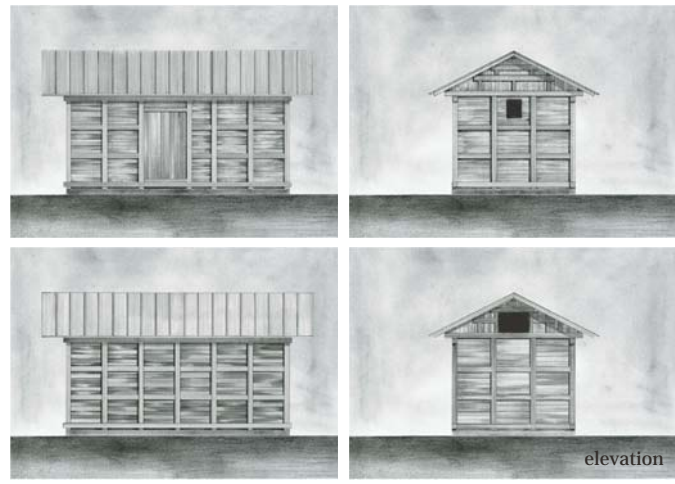


酪農家の家

— さくらんぼ畑と最上川と六畳倉庫小屋



実家の庭



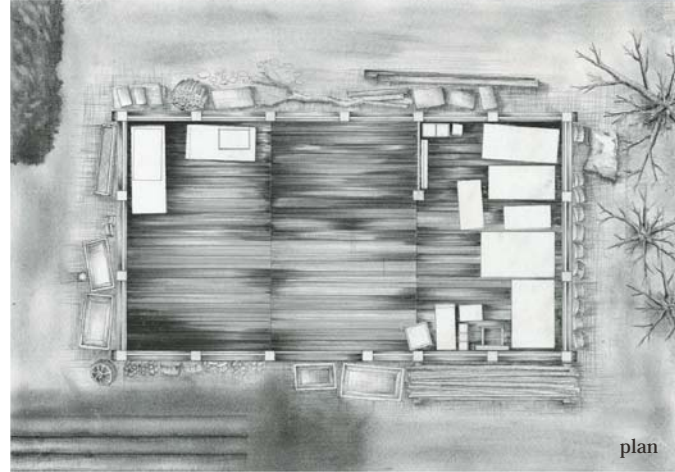
- 対象建物

対象とするのは山形の実家の庭に捨てられたように存在していた、築100年の糊入れ小屋(倉庫)。そこではかつて持ち込まれた筆筒、火鉢、漆器入れ、屏風入れ、本、服など計25個の記憶の断片が発掘された。現在では結婚時にタンスを持ち込み、利用する文化もなくなり、記憶が蓄積することもなく、建物が徐々に壊れ始めている状況である。

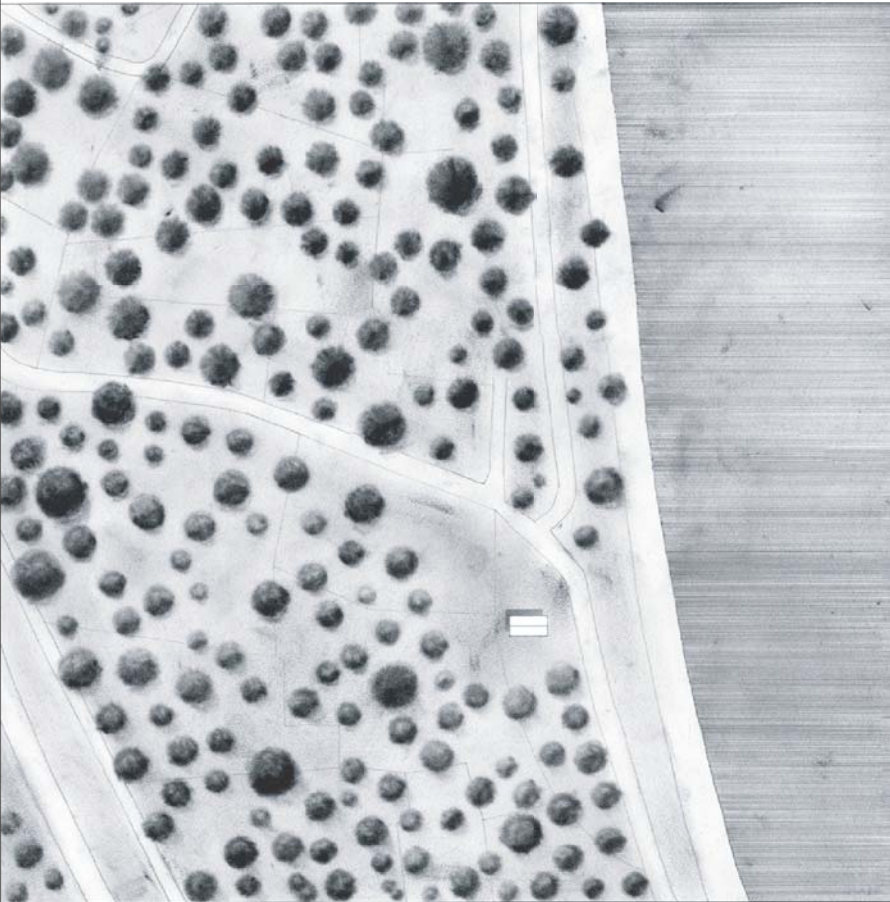
もし、この建物が、私の家族が過去という記憶を失ってしまったら心の拠り所はなくなるのではないか。私の家族のために、絶対的な心の拠り所となるような、ひとつの記憶の器を計画する必要がある。



25個の記憶の断片



plan

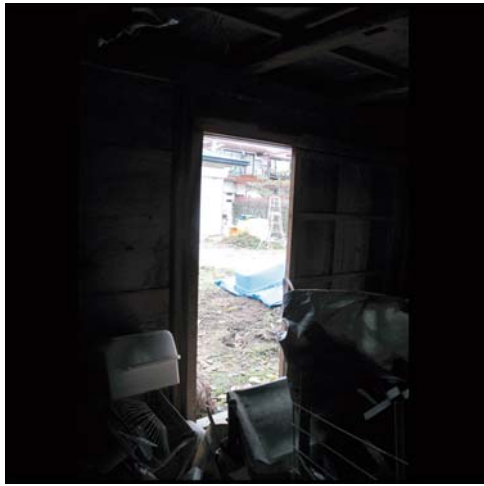


- 対象敷地

現在の倉庫は日当たりも悪く、人がゆっくり過ごせる場所として適していないため移築する。移築する場所は、我々の原風景でもある最上川沿いの、さくらんぼ畑の側の一画に選定した。この場所は自宅と、もう一つの家である牛舎から互いに徒歩五分という適度な距離にあるため、ふらりと気軽に立ち寄れる。自然とともに過ごせるような三つ目の家としての役割を持つように計画する。



site plan & section



倉庫内部

- 「空間」とは何か

それを考えるきっかけとなった、私の実家にある築100年の粗入れ小屋（倉庫）での体験を紹介したい。

その粗入れ小屋は、機能上、開口部はなく、暗闇である。その入り口の扉を開けて、中に入り、暗闇の部屋で100年間の蓄積された記憶と対面する。どこか懐かしい匂いと記憶の断片が襲ってきているような感覚さえある。時間が経ち、目が慣れてきた頃、その背後から私の父が突然、扉をあけ、暗闇の中に強い光が入ってきた。

そのとき、私はそれが『空間』だと思った。

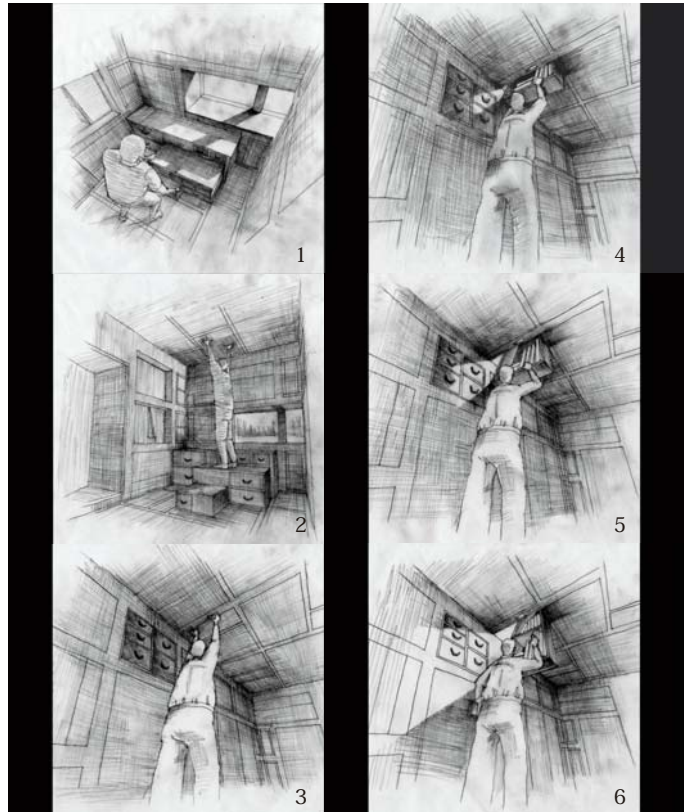
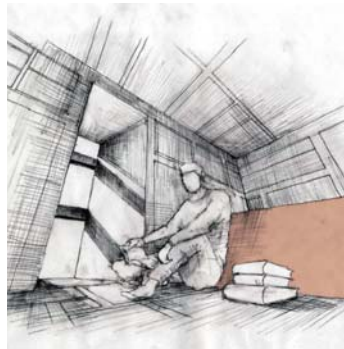
電気に照らされ部屋がコントロールされている日常の空間ではなかなか現れてくれない“空間”というものを強く感じた。

また、扉を開けるという人の行為によって、闇の状態から光が差し、空間が現出するという体験は、“倉庫”という建築でしかできない空間の形式ではないだろうか。さらにそれは、人の脳裏に焼き付き、記憶として残る『空間』になるのではないか。その空間現出モデルを提案する。

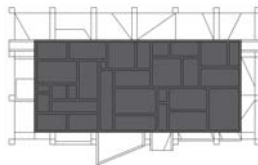
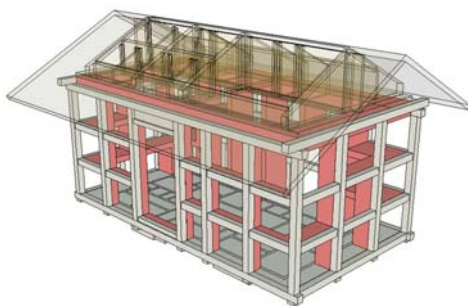
■ 光と闇による空間現出モデル



モノをひきだすことによって空間（光）が徐々に現出してくる。段階によって光の量を調整でき、ほしい光を手に入れることができる。さらに、とりだしたモノが行為を誘発する。

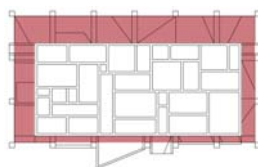


ここでは『空間』をつくることと、『行為』を行なうことが同時に進行する。



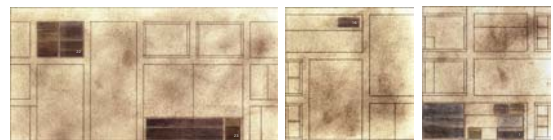
六畳

一人が時間を過ごすには適している広さ。かつての六畳一間のように変幻自在に空間が変化する。



壁厚

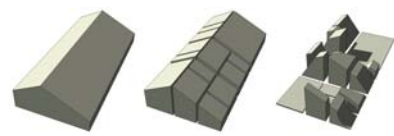
この場所で過ごす人が多様な光の質を選べるように4種類(15cm,30cm,45cm,60cm)の異なる壁で囲む。



Interior elevation



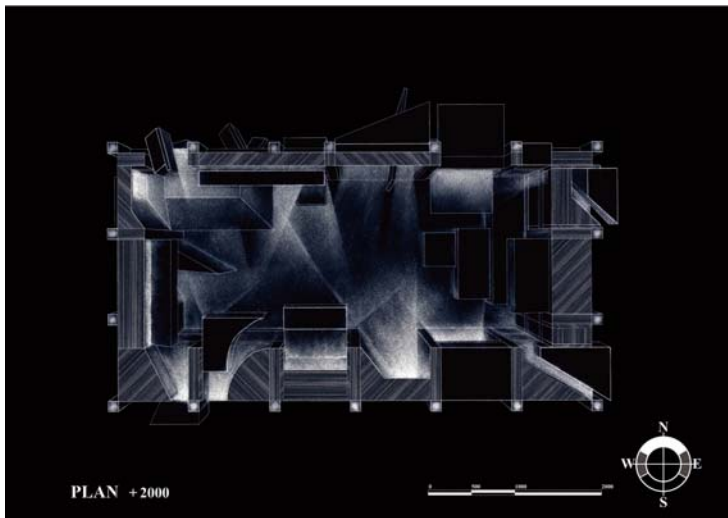
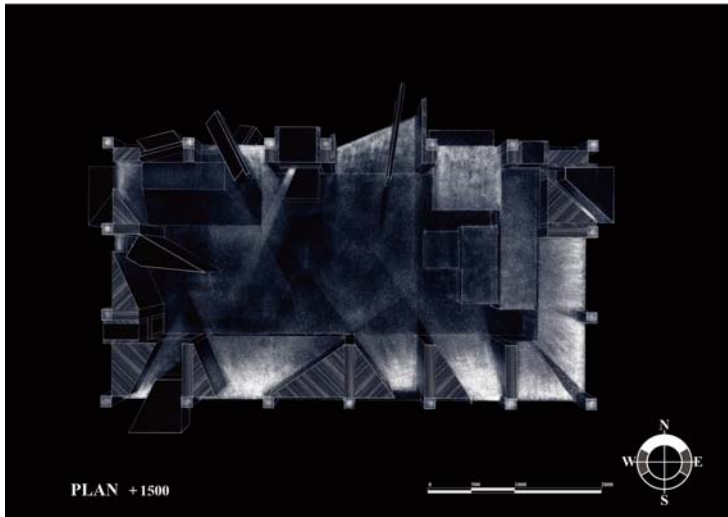
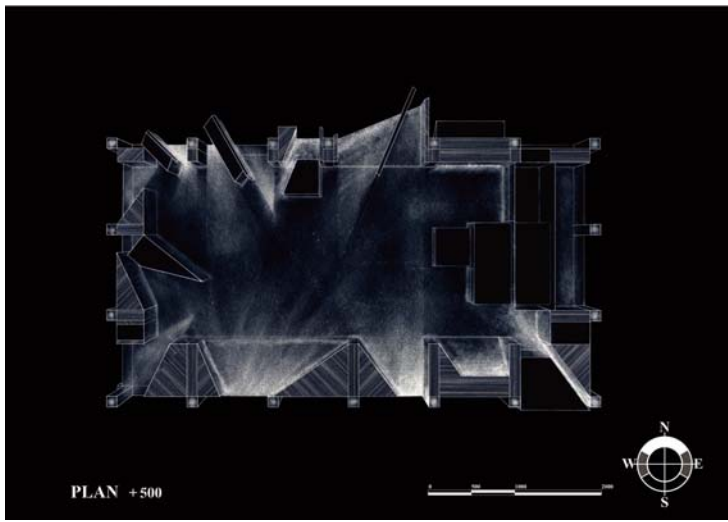
Plan



- 更新方法

既存建物の構造が弱っているため、既存構造の形に沿って新たな補強体を挿入する。既存外壁もそのまま利用し、更新前と更新後の建物の外観はほとんど変わらないが、内部は劇的に変化しているという建築の更新方法を行う。

屋根も同様に、大きさ・高さが異なるようにボリュームを分割し、多様な光が生まれるように計画する。また、そのうちの7つは、既存のタンスなどの発掘物を光が照らすようにする壁に配置した。



この倉庫は春夏秋冬、その日、その時間、その状態、その日の気分によって空間を想像し、同時に創造できる。受動的で様なマドはひとつとして存在しない。人が環境を感知し、状況によって空間を能動的に変えていく。

